

漱石と憲法第九条

～こんな漱石もあつたんだ～

講師 北野 豊

2011年3月6日（日）西奈生涯学習センター



- 講演要旨
- 自己紹介
- 漱石とえば、どんなことを思い出されるでしょうか
- 私と漱石の出会い

◆ テーマの動機

夏目漱石なつめ そうせきが生きたのは、大日本帝国憲法の時代で、日本国憲法ができることなどまったく知らなかった。したがって、直接的には、漱石と日本国憲法はまったく関係ない。けれども、それでは今日の話はもう終わってしまうわけで、今日、私が「漱石と憲法第九条」というテーマでお話しするのは、もし、漱石が今、生きていたら、「日本国憲法第九条」を守ろうと、全国を講演してまわっていたのではないかと、思うからである。漱石からちょうど100年後を生きる私たちは、漱石の思いを受け継いでいかなければならないのではないか。そんな思いで、今日の講演を引き受けた。これからの話しの中で、ちょっと違った漱石と、出会っていただければ幸いである。

◆ 漱石は戦争をどう描いたか

戦争で始まり（日露戦争）、戦争で終わった（第一次大戦）、漱石の作家生活（漱石時代：1904～16）。平民社へいみんしゃをつくった堺利彦さかい としひこは、『吾輩は猫である』を読んで、エンゲルスの肖像写真を印刷した平民社の絵葉書に、感想を書いて漱石に送った。

◆ 『こころ』の謎

「御前は他人を批判する何の資格もない男だ」

◆ 『私の個人主義』～学習院における講演をめぐって

「国家的道徳というものとは個人的道徳に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくら八釜しくっても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺をやる、誤魔化しをやる、ペテンに掛ける、滅茶苦茶なものであります。だから国家を標準とする以上、国家を一団と見る以上、よほど低級な道徳に甘んじて平気でいなければならないのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなって来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きを置く方が、私にはどうしても当然のように思われます。

国家的道徳のあるなしに関わらず、国家が危うくなれば誰だって国家の安否を考えるのだから、戦争や侵略の憂いがなければ国家的観念が少なくなり、個人主義が這入ってくるのは理の当然。」

静岡新聞の意識調査によると、「憲法九条を改正することに賛成する人」は、2005年に45.8%だったものが、改憲の危機感から「竜爪山九条の会」をつくろうと準備が進められた2006年には、37.9%に減り、その後、ほぼ38%台で推移してきた。

「竜爪山九条の会」が正式に発足した2007年には、「九条を厳密に守る」は、最高の21.5%に達した。ところが、昨年末の調査では、「九条改正」は41.4%と、40%台を回復し、「九条を厳密に守る」は、14.8%と、この6年間で最低になった。

◆ おまけ～静岡と漱石

【資料1】 森田草平と樋口一葉

『現代日本文学全集第42篇（鈴木三重吉・森田草平）』（改造社、1930年）における森田草平の自筆年譜によると、1903年の項に、《馬場孤蝶先生を飯田町の寓に訪いたることあり。先生、たまたま予が移転の通知を受けて、これはこれ故人樋口一葉女史の舊居にあらざるかとの疑ひを起し、わざわざ訪問せらる。果たして女史が嬌居の趾なり。》と、記されている。

森田草平は『煤烟』の中で、一葉の名を登場させている。《四日目の日暮は、夏子は最う此世には居なかつた。夏子といふ名は、此子の為に神戸が選んだので、名に因んだ一葉女史が臨終の間であつたといふ同じ部屋で、一歳に足らぬ小さい兒は、掌に載せられた藪が消えてでも行く様に、ほつりと息を引取つた。》自筆年譜には1903年に長男亮一が生まれたことは記されているが、1906年頃の生まれと思われるこの女兒のことは記されていない。『煤烟』はもちろん小説であるが、平塚らいてう（雷鳥）を巡る実話をもとになっている。登場人物がすべて実名で書かれていない中、あえて実名で書かれているのが一葉。そして女兒の名として使った夏子という名は、一葉の通称である（本名は奈津）である。女兒については年譜からも何もわからないが、もしその死があつたとしたならば、小説の進行状況からみて、1907年の出来事と考えられる。

【資料2】 広瀬中佐と像の運命そして『坂の上の雲』

広瀬中佐というと、万世橋駅前の像を思い出す。広瀬中佐（広瀬武夫、1868～1904年）は日露戦争時の旅順港閉塞作戦に従事。第2回作戦で閉塞船福井丸を指揮し、撤退時に行方不明になった部下杉野孫七上等兵曹を助けるため、船内を3度搜索中、ボート上でロシア海軍の砲弾の直撃を受けて戦死した。死

後、海軍少佐から中佐に昇進、日本初の軍神になった。広瀬中佐の銅像建設は海軍同期・上官らによって1904年に発議され、『それから』が執筆された翌年の1910年3月に万世橋駅前の電車通りに面して建てられた。広瀬の像は同郷（大分県竹田市）の渡辺長男、杉野の像は渡辺の実弟朝倉文夫（1883～1964年）が制作した。

『それから』を読むと、像が完成する前、すでに広瀬中佐の人気は廃れていたようである。末永く軍神広瀬を顕彰しようとして建てられた銅像の、その後の運命は、漱石の論評を裏付けるかのようである。1931年発行の『日本地理風俗大系』（新光社）には、つぎのような記述がある。《萬世橋驛前には、歌に名高い廣瀬中佐と杉野兵曹の銅像が立ってゐるが、散々邪魔にされた上、震災後市区改正の結果、電車通りから人目につかぬ裏通りに隠されてしまったことは、時勢の變遷とはいへ寂しい感じがする。》漱石の時代にはまだ靖国通りがなかったので、小川町からまっすぐ万世橋駅前へ来て、万世橋南詰から柳原通りを通過して尚国橋にむかう道が表通りで、電車もここを通過していた。関東大震災後、現在の靖国通りが建設されて表通りも移り、万世橋駅前の道は裏通りになってしまった。広瀬中佐と杉野兵曹の銅像も目立たなくなり、1947年6月、撤去された。

昨年12月、NHKのドラマ『坂の上の雲』第2部をみた、元NHKディレクター戸崎賢二氏は、21世紀の今、まさか広瀬中佐という軍人の英雄的行動の映像化に接するとは思ってもみなかった、と言ひ、司馬は、この作品が映像に翻訳されることを終生拒んだ。「軍国主義を鼓舞すると誤解される恐れがある」という理由だが、その懸念は現実のものとなったと述べている。戸崎氏は、《現在、北朝鮮や中国の脅威を理由に、軍事的な対応を強化することが、時の政権によって進められている。この時代にジャーナリズムが果たすべき課題のひとつは、軍事に対

して軍事で対抗する思想を厳しく批判することである。現行憲法は、紛争を武力で解決しようとした過去の戦争の思想の徹底的な反省の上に成立したはずであった。》と続けている。

【資料3】 漱石はなぜ捕まらなかったか

大日本帝国憲法下で、これほどのことを書いて捕まらなかったのは、漱石くらいではないだろうか。漱石はなぜ捕まらなかったのだろうか。私は三つの要因を考えてみた。第一は、何よりも漱石が結社しなかった。あるいは結社に加わらなかったということである。何を言おうが、個人の力だけでは、国家権力にとってそれほど脅威ではなかった。第二は、大逆事件など引き起こされながら、全般的に国家権力による弾圧はまだ限定的で、権力の側にも徳義心や人格をもった人物がいて、学習院講演で漱石が語っているように、《単に政府に気に入らないからといって、警視總監が巡查に私の家を取り巻かせ》る事態は抑制されていた。そのこととも関連するが、漱石自身が教養人、人格者として、権力の側からも評価され、学習院における講演に招いてくれる人がいるくらい、幅広い人脈をもち、そう簡単に弾圧の対象にできない人物であった。これが第三の要因である。もし、漱石が昭和の時代まで生き、同様の言動を繰り返していれば、少なくともその活動は大幅に制限されただろう。

漱石が結社に属しなかったのは、自らの個人主義によるものであった。国家が個人に優越することがあり得るのと同様に、属する団体が個人に優越することはじゅうぶんであり得る。それは漱石の望むところではなかった。漱石は講演の中で、自分が説く個人主義は、党派心がなくて理非がある主義であるとしたうえで、《朋党を結び団隊を作って、権力や金力のために妄動しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。既に党派でない以上、我

は私の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。》と、述べている。個人主義というのは、一人一人が「個」として生きていくのであるから、孤独で淋しいものである。それは、まさに現代人が抱える悩みであり、病理の根源になる。そしてそれとともに漱石は、教養ある知識人を超えて、社会運動に身を投ずることができない自分に対して、つねに苛立ちをおぼえ、孤立感を深めていったのかもしれない。権力と金力による不正にたちむかう時、個人がいかにか無力であるかも、漱石はよく知っていたであろう。

1911年2月1日、徳富蘆花は一高で『謀叛論』と題する演説をおこない、「新しいものは常に謀叛である」と説いている。1910年入学生に対するフレッシュマン歓迎の意味がこめられたこの演説会には、久米正雄、松岡譲（後に漱石長女筆子の夫、松岡陽子マックレインの父）、芥川龍之介ら、漱石の最後の門下生、ヤンガー・ジェネレーション達が出た（芥川は少なくとも演説内容を新聞では読んでいる）。

【資料4】選挙の応援

社会運動には直接手を染めなかったとみられる漱石も、一度だけ選挙運動に関わっている。1915年に、馬場孤蝶が「女子参政権、軍縮、言論・思想の自由」を掲げて衆議院議員選挙に立候補（東京市選挙区）すると、漱石・森田・生田長江・平塚らいてう・堺利彦らが応援した。結果は落選。堺は社会主義者で、投獄されていたため大逆事件の連座を免れた人物。



1867 (慶応3)年 牛込馬場下横町 (現、新宿区喜久井町1番地) に生まれる (直克の五男、母千枝)。里子に出され四谷に住むが、すぐ連れ戻される。

1868 (慶応4・明治元)年 内藤新宿の名主塩原昌之助の養子となる (以後、浅草三間町、内藤新宿 妓楼「伊豆橋」、浅草諏訪町を転ずる。1874年、養父母不和のため、養母と生家へ。年暮れに浅草壽町の養父のもとへ、日根野かつ・れん母娘と生活 (隣りが戸田小学校で、れん・漱石も通った))。

1876 (明治9)年 牛込馬場下横町の生家へもどる (養父母離婚のため、養母と)。市ヶ谷小学校、錦華小学校、府立一中 (中退)、二松学舎、成立学舎、大学予備門 (第一高等中学) を経て、1890年、東京帝国大学文科大学英文科入学。
(1884年、新福寺下宿。1885年、末富屋下宿。1886年、江東義塾寄宿舎。)

1887年 生家へもどる。1888年1月、夏目家復籍。

1894 (明治27)年 法蔵院下宿

1895 (明治28)年 東京帝国大学大学院修了、東京を離れ松山へ。(1896年に熊本へ)。

1896年 中根鏡子と結婚。1897年、長女筆子誕生。

1900年 ロンドンへ留学。

1903 (明治36)年 帰国。千駄木57の借家 (「猫の家」)。一高・帝大講師。

1904~05年：『吾輩は猫である』 (設定時期1904~05年)。日露戦争。

1905年：『琴のそら音』・『趣味の遺伝』 (ともに設定時期1905年)。

- 1906年：『坊ちゃん』『草枕』(ともに設定時期1905年頃)。
『二百十日』(設定時期1906年)。西片町借家へ転居。
- 1907年：『野分』(設定時期1906年)。教職を辞し、朝日新聞社入社。『虞美人草』(設定時期1907年)、早稲田南町借家へ転居。
- 1908年：『坑夫』(設定時期1906年頃)、『三四郎』(設定時期1908年)。平岡れん死去。
- 1909年：『それから』(設定時期1909年)。満州・朝鮮旅行。
伊藤暗殺。
- 1910年：『門』(設定時期1909～10年)。入院。韓国併合。
「修善寺の大患」。大逆事件(翌年死刑)。再入院。
- 1911年：退院。長野および関西講演旅行。入院。五女ひな子急死。
- 1912年(明治45年・大正元年)：『彼岸過迄』(設定時期1911年頃)。
～1913年：『行人』(設定時期1911～12年頃)
- 1914年：『ころも』(設定時期1912年)。学習院講演(「私の個人主義」)。第一次世界大戦開戦。
- 1915年：『道草』(設定時期1903年)。
- 1916年：『明暗』(設定時期1914年頃)。12月9日死去。
(作品の設定時期は講演者の見解。類推によるものは「頃」をつけた。)

中村是公(1867年～1927年)は満鉄総裁、鉄道院総裁など歴任し、東京市長にも就任している。祝辰巳、新渡戸稲造とならんで、後藤新平の「腹心三羽鳥」とよばれた。広尾にあった中村是公の邸宅は、その後、羽澤ガーデンになったが、2005年営業を終了した。

【参考になる本】

水川隆夫：『夏目漱石と戦争』(平凡社新書、2010、税別880円)